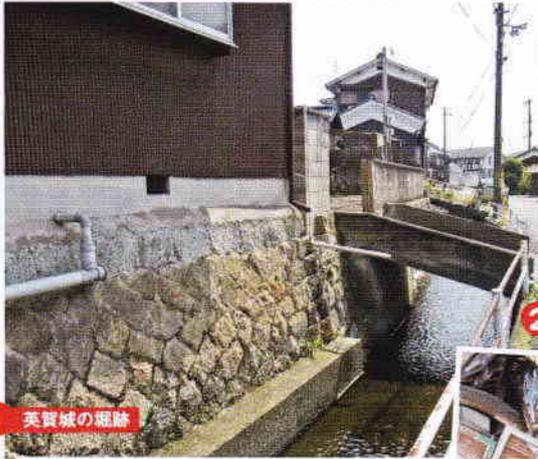




黒田官兵衛ゆかりの地めぐり・英賀

官兵衛が毛利水軍5千を打ち破った英賀合戦の地。英賀お城主以下一向宗徒になり信長に抵抗。秀吉により落城となりました。官兵衛を世に広めた司馬遼太郎「播磨灘物語」の石碑もあります。



1 英賀城の堀跡



2 英賀薬師堂 (旧法寿寺跡)



英賀城主三木家墓所 2



3 英賀神社の絵馬



3 英賀神社



3 英賀神社の鳥居



3 英賀城土塁と石碑



司馬遼太郎文学碑 4



5 英賀本徳寺跡石碑



5 明蓮寺 (英賀本徳寺跡石碑)



6 異地蔵



6 田井ヶ浜跡



5 英賀本徳寺跡 (夢前川歌野橋上流)



英賀城本丸之跡石碑 7



所要時間：約 65 分 (見学時間含まず)



官兵衛が毛利水軍5千を打ち破った英賀合戦の地。英賀は城主以下一向宗徒の抵抗、秀吉により落城となりました。官兵衛を世に広めた司馬遼太郎「播磨灘物語」の石碑もあります。

英賀へのアクセス

■山陽姫路駅から飾磨駅で乗り換え、山陽網干行きで「西飾磨」駅下車。(4駅約10分・230円)



官兵衛の時代、英賀は単なる城ではなく、播磨最大の港町であり、英賀本徳寺を中心とした一向宗徒の町でもありました。古い城下町の迷子になりそうな細い路地道を、わずかに残る堀や土塁の跡から当時の栄華を想像しながら散策してみてください。

ほかのよってくだんコースへ
19 青山 タクシーで 6.3 km (料金目安 2,300円)
みどころ/土器山、青山古戦場跡

近くのタクシー会社
富士タクシー 0120-868-119

1 英賀城の堀跡と土塁

このあたりを東西に延びる溝がかつての堀跡の一部で、英賀薬師北側には今も土塁の一部が残っています。

2 英賀薬師(旧法寿寺跡)

英賀薬師の境内は英賀城井ノ上口の跡といわれ、今でも土塁の一部が残っています。境内にあるひときわ目を引く五輪塔は、英賀城主三木家のものです。

3 英賀神社

社記によると播磨国風土記にある英賀彦神・英賀姫神を祀る古い神社で、町名の由来もここ。天満宮は嘉吉年間に完成したとみられ、境内には寛文7年(1667)銘の手水鉢や貞政6年(1794)の狛犬が、拜殿には江戸期の絵馬が多く残っています。また、明治時代の算額もあり、和算が盛んだったことを物語っています。本殿裏には英賀城跡の土塁が残っています。

4 司馬遼太郎文学碑

英賀神社拜殿の東側には「播磨灘物語」「司馬遼太郎」と刻まれた石碑があります。司馬遼太郎のルーツは祖父の代までこの地で、自らも愛情を込めて播州門徒の末裔と名乗っていました。

5 英賀本徳寺跡石碑

英賀本徳寺跡は、現在の歌野橋上流約100mの地域にありましたが、昭和12年に広畑製鉄所建設にともなう夢前川の付け替え工事により、遺跡は河床となり、それまで建てられていた石碑は明運寺境内に移されました。

6 田井ヶ浜址(異地蔵)

1576年(天正4)、官兵衛の進言により御着城主・小寺政職が織田家に与することを決めると毛利水軍5000人が田井ヶ浜に上陸しますが、官兵衛は500の手勢で毛利軍を追い返し、一躍その名を高めることとなるのです。英賀港は古代からの港で、室町時代には英賀城下の市場町で1580年(天正8)の英賀城落城まで三木氏の一族と英賀突が活躍した交易の港町として栄えました。しかし落城後は荒れ果て、熊谷家がこの地を清め地蔵尊を祀りました。この地は英賀神社の異方向に当たるため「異地蔵」と呼ばれました。

7 英賀城本丸之跡石碑

英賀城は鎌倉時代には若が置かれ、室町時代になると播磨の守護大名・赤松氏の一族が守りました。その後、三木氏が城主になり規模を拡大し、豊田秀吉に滅ぼされるまでの140年間三木氏の居城として栄えました。英賀城の本丸・二の丸はこの碑の前を通る街道より南にあったといわれ、このあたりには「城内」という字名が残っています。

ちょっとお勉強。

英賀城の落城のおぼし

黒田家は英賀の三木氏に官兵衛の妹を嫁がせており、「青山の戦い」には三木氏は援軍を送っています。しかし官兵衛が信長につくと英賀は官兵衛の敵となり、毛利勢とともに姫路城を狙います。三木城が落城の後も、城主以下一向宗門徒の英賀は信長への抵抗をやめませんでした。秀吉は、弟秀長を総大将として山崎山に本陣を置き支城を落としながら付城を築き英賀城攻めをはじめます。英賀衆も激しく戦いますが、寡敵せず、落城、英賀の栄華は幻と消えました。

A 広畑天満宮の玉垣

広畑天満宮には、司馬遼太郎の祖父・福田惣八の名が刻まれた玉垣が現存しています。「祖父惣八は、播州人である。兵庫泉姫路市の浜寄りの郊外の広という村の出身で、そこに江戸時代のあいだずっと百姓をしていた家系に生れた。戦国ころは播州三木城にその先祖が籠城したという事であるが、身分はわからない」という「歴史と小説」の文章が、境内にある石碑に刻まれています。

